

校名：お茶の水女子大学附属幼稚園

所在地：〒112-8610

東京都文京区大塚2-1-1

電話番号：03-5978-5882

記載日：2016年 5月 17日

記載者：伊集院 理子

記載者役職：副園長

貴校の校風、おおまかな特色について：

【附属幼稚園の特色】

日本で最初の官立幼稚園として1876年に誕生した本園は、本年創立140周年を迎える。誕生のときから現在まで、日本の幼児教育を牽引してきた。1932年に文京区大塚に移転してから、起伏のある土地を生かした自然豊かな園庭と意匠を凝らした園舎の環境を大事に継承し、その環境の中で幼稚園教育の基本である環境を通じた教育の探究を重ねてきている。

【附属学校全体】

・「オールお茶の水体制」：一つのキャンパス内に大学とすべての附属校（幼小中高）があるという地縁を活かし、日常的な連携体制を基盤として、「教育」「研究」「運営」の各分野において、緊密な連携性を保つ。

・幼小中高と一貫して児童生徒の主体性自発性を尊重したアクティブラーニングを推進している。

・緊密な連携を可能にする各種ミーティング：学長を長とする附属学校本部会議を中心に、附属学校委員会（運営）、学校教育研究部（教育と研究）、教育研究推進専門委員会（附属と大学の共同研究推進のための会議）をそれぞれ定例でおよそ毎月、高大連携実施委員会を年数回程度開催している。

・附属学校教員と大学教員による教育の連携・共同：附属学校教員の大学の授業への協力（教職科目、非教職科目共）、高大連携における大学教員の高等学校教育への協力がある。

・公開教育研究会、合同研修会（学内・地域）、外部からの参観視察受入を積極的に行う

・東村山郊外園を大学・附属校が管理運営し、幼小中高の自然教育、勤労教育に活用している。

・附属学校の校種を超えた教員と大学教員による、テーマ別部会（研究会）を行ってきた

貴校の卒業生の活躍状況について：

① 追跡調査をしているかどうか、また、その方法
追跡調査は行っていない。

② どの程度、把握できているか、また、その情報はどこが持っているか（大学、学校園、その他）
同窓会組織（ちぐさ会）がしっかりと活動しているため、卒業生の動向についてある程度の情報を集め、同窓会で集約している。

③ 状況を具体的にお書きください

各方面の第一線で活躍している卒業生が多い。園と同窓会で協力して、卒業生それぞれの成長の原点といえる懐かしい園舎・園庭で過ごすことができるよう、1999年から毎年ホームカミングデーを開催している。例年、昭和初期の同窓生から新1年生まで、教職員も含めて老若男女500名近く（今年度実績 492名）の参加者が集まる。園への思いや同窓会としての結束が強い。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

○教育

・遊びや生活を中心においた幼児教育・保育

子ども一人ひとりが、自分の興味・関心から遊びや生活に取り組むことを重視する、倉橋惣三（本園の元園長）の子どもを中心においた幼児教育・保育を継承している。夢中になって元気に遊び、興味をもったことを試したり探求したりする生活の中で、人生教育の基本となる根の力（主体的に考え、判断し、行動する力）を育てている。

・教師の連携を重視した幼児教育・保育

3学年共、2学級に担任教諭2名と非常勤TT教諭1名体制をとっており、それに加え全体フリー教諭1名、養護教諭1名、園長、副園長が連携する「チームティーチング」体制をとっている。毎朝の打ち合わせ会、月一回の拡大打ち合わせ会（非常勤教諭も含む）、常勤教諭の研究会などを重ね、保育者間の連携が密に図れる体制を確保し、各学年の保育計画、全園児の子ども理解を共有化して、保育にあたっている。

○研究

伝統を大事にしながらも、先見性を持って今日的な課題に取り組んでいる。

・幼小連携研究 平成13年度～

幼小連携研究の2年目の平成14年度より、「幼・小接続期」を設定し、小学校入学に伴う生活の大きな変化を、子ども達が前向きに受け止め、安定して過ごすことができるように、「なめらかな接続」と「適度な段差」をキーワードにして、その期間の実践について、幼稚園と小学校の教師で検討を重ねてきた。

小学校への「なめらかな接続」を視野に入れて、園の中で展開する生活や関わりを捉えなおしていくことを一つの柱として研究をすすめてきた。その過程で、入園から修了まで連続的に続く幼稚園の生活を、大きくまとめて「出会い・安定のステージ」「葛藤・探究のステージ」「協力・創造のステージ」の3つで捉えていく「ステージ」の考え方を取るようになった。個々の子どもの発達状況、生活実態、関心を3つの「ステージ」で押さえ、教師はともに生活する者として個々の子どもの生活の舞台に立ち会い、「現在進行形」で子どもたちの「今」を肯定的に支え、それぞれの「今」を充実させていくことを通して、一人ひとりの成長・変容、学びの広がり・深まりを目指している（図1）。

また、幼稚園の生活の中で展開している「関わり」を成り立たせている構成要素として「からだ」「もの」「ことば」「ともだち・なかま」を取り上げ、それらを「保育分野」として位置づけ、保育を組み立てていく上での視点としている（図2）。

3つのステージを縦軸に、4つの保育分野を横軸に、本園の教育課程「学びの概要」を作成してきた。「学びの概要」は、各年度の保育実践内容、研究の内容を反映させて見直し・修正を重ねている。

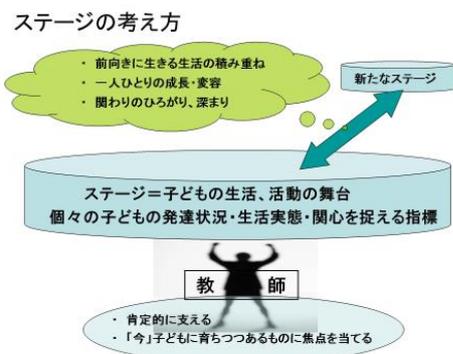


図1

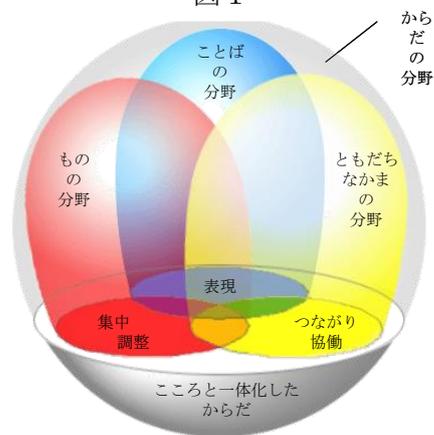
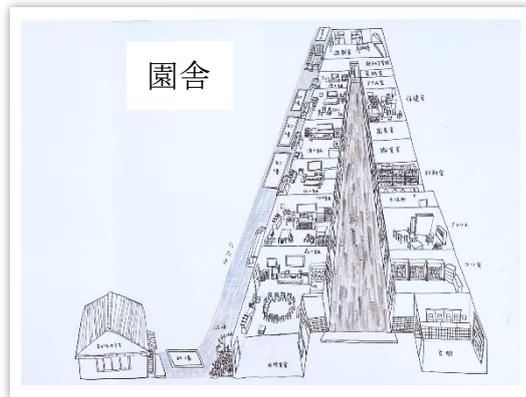


図2

・「環境に対する豊かな感受性を育てる」平成20年度～平成23年度

本園の自然環境、園舎環境の中での子ども達の遊びの事例研究を通し、下記の園庭マップ、園舎マップのどの場所で、どのような遊びが展開していて、子どもたちが何を学び、何を感じ取っているかを明らかにした。

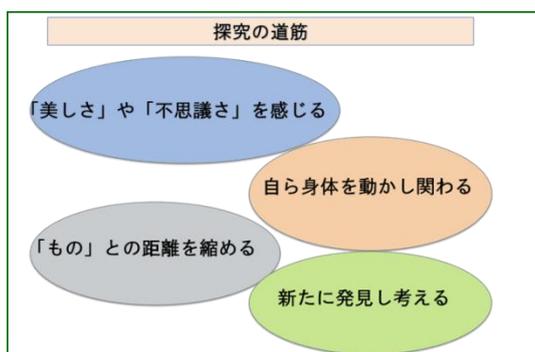


・「探究力・活用力が発揮される生活」平成24年度～平成27年度

「探究・活用」は、「もの」との関わりに深く関係していると考え、まずは、「もの」の側面から、子どもと「もの」との関係を捉えた（一年次「透明」なもののかかわり、二年次「道具（遊びに必要なもの）」のかかわり）。3・4年次は、「もの」との関わりの中で生き生きと動きだす子どもの「からだ」に着目して研究を進めたが、その際、平成14年度の幼小接続期研究に立ち戻り、「からだ」とは、心と一体となったもの、心を映しだしているものであり、かかわり合いを成り立たせている構成要素である4つの保育分野（からだ・もの、ことば、ともだち）の根幹をなすものであることを再確認した。



子どもたちのありのままの姿を丁寧に見取り、記録して読み合い、語り合う、という園内研究会の積み重ねの中で、探究の道筋を下図のように導き出した。



●「美しさ」や「不思議さ」を感じる

ものもつ「美しさ」や「不思議さ」に子どもたちの心がほぐれ、思わず体が動き出すことが探究の始まりである。

●自ら身体を動かし関わる

子どもの「からだ」が自ら動きだそうとするその過程には、自分らしく「ある」と、なりたい自分に「なる」ことの2つの側面があり、両者をいきつ戻りしていくことは、探究そのものである。

●「もの」との距離を縮める

「もの」の声を聴き、「もの」と対話的に関わることで、探究を深めていく上で必要な感性である。

●新たに発見し考える

身の回りのもの、ひと、ことと関わる中で、もっとこうしてみたいと思いをつなげ、思いを共有する人たちとの関係が繋がっていく中に、工夫が生まれ、アイデアが生まれ、新たな発見やさらなる思考の道がひらけていき、探究は深まっていく。

・「幼児期の非認知的な能力の発達をとらえる研究 ー感性・表現の視点からー」

現在世界的にも注目されている「非認知的な能力」について、平成27年度文部科学省委託研究を受け、全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会の協力のもと、お茶の水女子大学が窓口になって、幼稚園の生活の中でどのような「非認知的な能力」が育まれているのか、多数の実践事例をもとに明らかにした。

○社会貢献

・公開保育研究会の開催 年2回（1学期、3学期）

各回80名前後の参加者に制限しているが、参加申込み初日に締め切りになることが多い。「子どもたちが遊ぶ姿から学ぶ」という姿勢に徹した研究会で、具体的な子どもたちの様子について本園の教員と参加者で協議しあう時間をたくさん設け、互いに学び合う研究会を目指している。本園の研究内容についても毎回発信し、研究内容を深めるために、学内外より講師を招聘して講演も行っている。

・国内外の保育参観者、施設見学者を最大限受け入れている（昨年度実績 国内約240名、海外約30名）

・日本最古の幼児教育研究誌『幼児の教育』（1901～）を大学と協力して編集している（フレーベル館発行）。バックナンバーは、大学図書館からWEB版で公開され、世界各国からアクセスされている。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

本園は公開研究会、参観・研修の受け入れ、研究紀要等を通して、全国に向け情報を発信してきた。今年度、お茶の水女子大学の中に文京区立お茶の水女子大学こども園が開設され、こども園と本園との連携を深めることで、実践研究の積み重ねの中で蓄えられている本園の実践知をこれまで以上に地域に発信していくことを目指していきたい。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

本園は日本で最初の幼稚園として誕生してから140年の歴史を持つ。登録有形文化財に指定されている園舎環境、起伏を生かした自然豊かな園庭環境は、「環境を通しての教育」といわれる日本の幼児教育の原点として、歴史的な価値を持つものである。その環境の中で、子どもを中心においた幼児教育・保育の伝統を大事に継承するとともに、魅力のある、特色のある取り組みのところで述べてきたように、「幼小連携」「環境」「子どもの探究力・活用力」「非認知的な能力」の研究など、先見性を持って今日的な課題についての研究も積み重ねてきている。その研究内容を、公開保育研究会で発表するとともに、研究紀要にまとめて、全国に発信している。

同一キャンパスにあるお茶の水女子大学の関係学科や関係教員との協力体制が十分確保されており、これまでも互恵的に研究をすすめてきたが、さらに、大学、こども園、いずみナーサリー（学内保育所）との連携を緊密にし、乳児からの実践研究を丁寧に積み重ねることで、日本の乳幼児教育をリードしていくことが本園の使命であると考えます。